

論文要約

バウムガルテンの実体論

—スピノザ論争史から読み解く 18 世紀ドイツ哲学史—

津田葉里

一橋大学大学院社会学研究科

SD191017

目次

凡例

序論 思想の隠された結節点

- 1 従来のバウムガルテン研究の特徴と問題の所在
- 2 バウムガルテン研究の新局面と残された課題
- 3 本稿における方法と限界
- 4 論文構成

第1部 初期近代ドイツにおけるスピノザ論

問題設定

第1章 初期近代におけるスピノザの群像

1. C・トマジウスによるチルンハウスに向けたスピノザ批判——スピノザ主義の導入と、万物の内在因に特徴付けられたスピノザ
2. シュトツシュからブッデウスまで——単純化された汎神論に特徴付けられたスピノザと唯物論の交叉
3. ラウ——汎神論の拡張と機械論的な唯物論に特徴付けられたスピノザ

第2章 ランゲのスピノザ論——バウムガルテンによるスピノザ批判の前史 (1)

1. ランゲ-ヴォルフ論争とは何か
2. スピノザ主義とは何か——自由と自発性、あるいは偶然性と必然性の問題
3. スピノザ主義の定式化——「完全なスピノザ主義」と「部分的なスピノザ主義」
4. 世界-機械への批判——世界の因果系列は同一であってはならない

第3章 ヴォルフのスピノザ論——バウムガルテンによるスピノザ批判の前史 (2)

1. スピノザ主義とは何か、そしてスピノザ主義者とは誰か——唯一実体説の強調
2. スピノザ主義の仮説から帰結するものとしての運命論への批判
3. スピノザ主義の礎である唯一実体説への批判

第2部 バウムガルテンとスピノザ論争史

問題設定

第4章 バウムガルテンにおけるスピノザ——スピノザ論争史での位置付け

1. 『形而上学』初版におけるスピノザ
2. 『形而上学』二版におけるバウムガルテンとスピノザの対峙

第5章 バウムガルテンの実体論における三重の差異化——伝統的な理論の刷新とスピノザ論争史への応答

1. 伝統的な実体定義からの差異化

2. 二版における洗練された実体論
3. 実体は神と被造物のどちらに相応しいか
4. スピノザ論争史への応答としての、二重、そして三重の差異化

第6章 モナド論——実体論との比較を軸に

1. 問題の所在
2. モナド論
3. 実体論に基礎付けられたモナド論
4. 実体論から区別されたモナド論の役割

第7章 実体化された現象とは何か——実体的なものによる再構成の試み

1. 問題の所在
2. 実体論における実体化されたもの
3. モナド論における実体化された現象
4. 物体論における実体化された現象

補論 初期近代ドイツ哲学における一元論の諸相——バウムガルテンにおける心身二元論とスピノザ論の交叉という視点から

1. 一元論と心身二元論
2. 18世紀ドイツにおける一元論とスピノザ（主義）
3. バウムガルテンのスピノザ（主義）批判にみる一元論

結論

文献表

本稿の主たる課題は、バウムガルテンという思想家をスピノザ論争史のうちに位置付けることで彼の思想がもつ独自性を明らかにすることである。その課題の解決には、初期近代ドイツにおけるスピノザ論に注目して一つのスピノザ論争史を提供すること（第1部）、そして、バウムガルテンをスピノザ論争史のうちに位置付けるとともに、スピノザ論争史を軸としてバウムガルテンを再解釈すること（第2部）が必要である。

第1章は、ヴォルフとランゲの論争、そしてバウムガルテンのスピノザ論の検討に先立って、スピノザをめぐる当時の言説とそこで扱われる論題の関係を改めて整理することで、当時のスピノザ像の変遷を辿ることを目的とした。具体的には、スピノザ自身とも交流があったチルンハウス、当時スピノザ主義者とみなされていたシュトツシュやラウ、そして初期ドイツにおけるスピノザ論争史の立役者であったC・トマジウス等の言説から、そこでの「スピノザ主義」という表現に注目してその意味内容を抽出した。それらの作業を通じて、次のような展開が確認された。18世紀以前、『エチカ』刊行直後のスピノザは神学的問題における異端者のうちの一人として、扱われてきた。また同時期には、スピノザに限定されない多様な急進的思想がドイツに流入し、単純化された汎神論と生理学に基礎付けられた唯物論が水面下で流行するようになる。その傾向は18世紀の始まりまで根強く残るが、17世紀末に出版されたベール『歴史批評辞典』を転機として、スピノザは古今東西の多様な汎神論的思想と結び付けられることになった。ドイツ国内でスピノザの汎神論が単純化されて理解されていたことは、既に成立していた多様なスピノザ像を、ベールのスピノザ理解に即して統合するための準備となっていたのかもしれない。他方で、唯物論については生理学的説明ではなく、世界における構造への着目が確認されるようになっていた。

第2章では、まずランゲ-ヴォルフ論争の概観を確認し、その後ランゲがどのような論点でもってヴォルフをスピノザ主義者と批判したのか、その背景と論題の要点を検討した。具体的には、彼の『神、世界、及び人間についてのヴォルフの形而上学説における、誤りで有害な哲学に関する慎ましく詳細な発見』の冒頭に付された「手引き」を考察対象として、ランゲのスピノザ理解を描き出すよう努めた。ランゲはヴォルフの、とりわけ予定調和説のうちにスピノザ主義を捉えていた。世界が自動機械であるならば、そこにあるのは自発性だけであり、人間の自由が成立しないというのがランゲによる批判の要点であった。また、私たちが注目したのは神学論争から哲学論争へ、スピノザを取り巻く論争空間がランゲの議論内部で移行した点である。ランゲはスピノザを人間の自由を脅かす思想と捉えた上で、前半部では彼以前のスピノザ論争史を引き継ぐように神学的なアプローチから、つまり神の予知と人間の自由意志の両立の問題として議論する。しかしながら、自由を偶然性と必然性の問題のうちに置き換えることで、後半部ではスピノザの運命論を世界の因果系列の種類の問題として批判し、ヴォルフへと結び付けていた。以上から、スピノザ主義というレッテルの下でライプニッツ-ヴォルフ哲学、とりわけ予定調和説への批判はそれ自体としては些かの外しているものの、その批判が同時にモナド一元論へと向かっている点に注目することで、再評価に値することが示された。

第3章では、ランゲによってスピノザ主義者と批判されたヴォルフを考察対象とした。具体的には、ヴォルフがランゲとの論争の終局にあたる時期に出版した『自然神学』におけるスピノザ論を検討対象とした。従来はスピノザの『エチカ』を正面から批判した最初のドイツ思想家として評価されてきたが、実際に彼のスピノザ批判は方法論に向けられるばかりであることが示された。つまり、ヴォルフが批判したのは、概念や定義の証明が不十分であるにもかかわらず、そこから一切の体系が演繹された点である。ゆえに、ヴォルフのスピノザ論の功績とは『エチカ』からの引用によってスピノザを紹介

した点にあると評価できる。但し、第2部の主題となるバウムガルテンとスピノザの問題について、ヴォルフがスピノザ主義の礎として唯一実体説に対する批判を展開していた点は重要であった。

以上の三章の議論を通じて、私たちは初期近代ドイツにおけるスピノザ論争史を仮説的に提示した。スピノザ論争史が私たちに気付かせるのは、神学上の異端を批判するためにスピノザを用いるかぎり、スピノザは無神論を意味するレッテルに留まるという点である。もし私たちが近代ドイツ哲学におけるスピノザの影響を示そうとするならば、ランゲによって中心に据えられた世界-機械論、そしてその前提となったラウの世界の構造に注目した唯物論に焦点を当てなければならない。あるいは、ヴォルフによる実体定義への批判に着目すべきである。これらの哲学的問題とバウムガルテンがどのように対峙したのか、これが第2部の課題となった。

第4章では、バウムガルテンにおいて、「スピノザ」や「スピノザ主義」がどのように語られてきたのかを確認した。それによって、彼の主著『形而上学』の初版と二版以降ではスピノザの扱いが異なること、さらにランゲの問題意識を引き受けるような「スピノザ主義の運命」という運命論の議論と、ヴォルフからの影響が色濃い「形而上学上のスピノザ主義」及びその帰結である「神学上のスピノザ主義」に関わる実体論が、スピノザ論争との関係のなかで語られていることが明らかとなった。したがって、以降の議論は大きく二つの方向性から選択可能となる。つまり、前者の世界の因果性の問題を主題とするか、あるいは後者の実体論を主題とするかである。ここで私たちは後者に議論を限定した。というのも、多くの先行研究が看過してきた諸版の異同や各版の序文からは、彼の実体論に対する強い問題関心が確認されるからである。

第5章では、スピノザがバウムガルテンに残した課題は実体定義の問題であるという仮説の検証を行った。先述のとおり、それは『形而上学』の異同や序文を考察対象とすることではじめて指摘される事柄であるから、私たちは「第二序文」と実体論の異同の検討に注力した。それによって、伝統的な実体定義からの差異化だけではなく、形而上学上のスピノザ主義からの、そしてヴォルフの実体定義からの差異化のうちに成立していることが示された。バウムガルテンはヴォルフによるスピノザの実体定義の批判を引き受け、それを実体は神と被造物のどちらに相応しいかという問題に変換した。彼の出した結論は、実体は両者に相応しい概念でなければならないというものであり、その立場を二版で洗練することとなったのである。これまでスピノザとの関係が一切言及されてこなかった彼の実体定義、そしてそれを支える実体的なものに特徴的な実体論が、実際にはスピノザ論争史なくして成立しなかったことを、私たちは従来とは異なる方法の採用によって、明らかにすることができた。これはバウムガルテン研究にとって大きな成果である。

第6章及び第7章では、スピノザ論争の所産とも評価可能な彼の実体論が、形而上学全体のなかでどのような役割を担い、何を基礎付けているのかを検討することで、スピノザの余波の範囲を見定めるよう試みた。

第6章では、ライプニッツ哲学の枠組で解釈する従来の方法の不十分さを示すために、モナド論と実体論の関係を問題とした。ライプニッツから離反していくヴォルフに対してライプニッツそのものへと回帰する立場として、バウムガルテンのモナド論はこれまで読まれてきた。しかしながら、実体論がモナド論をいかに基礎付けるかを問うことで、彼が実体論とは異なる役割をモナド論に見出し、創造以後の世界における物体の相互関係を説明するための理論として位置付けていることが明らかとなった。但し、スピノザ論争史との関係を示すことは課題として残されたままである。

そこで第7章では、異なる概念から実体論に基礎付けられた物体論の検討を行った。「実体化された現象」は、カントの「現象的実体」がもつ新規性を際立たせるために、

不当な評価を受けてきた概念である。私たちはバウムガルテンの実体論のうちに実体化された現象を位置付け直すことで、実体的なものの問題としてその仮象性と実体性を捉え、実体性にこそ注目すべきであると主張した。このとき、実体化された現象の成立を支えるのはスピノザ論争の所産である実体的なものであることが重要であった。つまり、スピノザ論争史は実体論へと直接に影響を与え、それが物体を含む世界や心身に関する議論の基礎付けを担うという仕方で、形而上学全体へとその影響の範囲を広げているのである。

補論では、スピノザそのものへの言及からスピノザ論争史を問題としてきた第1部及び第2部の成果を、スピノザに帰せられる代表的な教説の一つ、つまり一元論の18世紀ドイツにおける導入と展開という視点から振り返った。

以上から、バウムガルテンをスピノザ論争史のうちに位置付けるという方法の有効性が示され、また、彼の実体論とそれに基礎付けられた形而上学の各部分がスピノザ論争史への応答という側面をもつことが明らかとなった。

さらに、本稿はバウムガルテンを一例として、スピノザ論争史に焦点を当てる方法の有効性を示すものである。スピノザ論争史におけるスピノザがスピノザそのものではないという事情が、たしかに議論を複雑にはしているが、結果的に〈誰かをスピノザとみなす〉あるいは〈自らをスピノザ主義者と想定する〉ところの当人が依って立つ思想上の立場を剥き出しにすることに一役買っていたことが明らかとなったのである。ゆえに、私たちはスピノザがどのように語られたか、あるいは、スピノザがどのような思想と半ば恣意的に結び付けられてきたかを検討することで、当該論争の担い手を取り巻く思想状況やその思想上の立場を捉えることが可能である。それゆえ、スピノザ論争史に焦点を当てる方法は、当時の思想状況を把握するために有効であると評価できよう。さらに、個別の思想家の理論を精確に捉えるためにも有効であることは、バウムガルテンだけでなく（第2部）、ランゲを扱った議論（第2章）に表れている。ランゲの場合には、スピノザ論争史のうちに位置付けることで彼が果たした哲学史上の役割がはじめて浮き彫りになった。スピノザ論争史に焦点を当てる方法は、例えば当時の代表的な思想家の思想枠組のうちに落とし込んで彼を読解する立場、や当時の思想空間という文脈を排してテキスト読解をする立場に潜む方法論上の問題点を克服するという点でも非常に有効なのである。